



【東大航空研究所編】

航研機 世界記録を更新

「臨時軍用気球研究会」ができた1909（明治42）年当時、日本で一番飛行機に詳しいのは東京帝国大学の田中館愛橋博士だといわれた。田中館は日本の航空発展の先達たる任を負うことになる。軍部は一刻も早く「西洋に追いつき追い越せ」と焦り、ただ飛びさえすれば良いという考えだったが、技術力も工業力も未熟で飛行実現には苦勞していた。

航空博士と呼ばれた田中館は西洋に飛んで最新情報を集め、必死で勉強して日本へ届け続けた。日本でどんな質問をされても「知らない」とは言えない田中館だった。帰国の度、田中館は「基礎研

究こそ大事」と山川健次郎帝大総長に訴えた。長持ちに穴を開けガラスをはめた風洞を造り、基礎である気流の研究から始めた。

16（大正5）年、東大内で6人の博士が参加し、田中館を委員長とする航空学調査委員会の検討が始まった。同年、田中館は60歳での定年退職を実践するが、山川総長は航空研究所を引き受ける条件で辞職を認める。

18年、東京深川区越中島に東京帝国大学付属航空研究所は設立され、大学に航空学科ができる。21年、東京帝国大学付属航空研究所に格上げされて本格的な航空研究が進む。23年、関東大震災で研究所が焼失したため、東京目黒区駒場への移転が進んだ。

初期の航空研究所には田中館を中心に、田丸卓郎、寺田寅彦、本多光太郎らそうそうたる博士たちが名を連ね、風洞、飛行機、発動機、物理、化学、機械、測器などの各部で基礎的研究から実現への研究へと加速させていく。38（昭和13）年5月、東大航空研究



東大航空研究所で造った実験用具・3メートル風洞を前にする田中館愛橋（1930（昭和5）年ごろ）（田中館愛橋記念科学館提供）

所が造った飛行機（航研機）が、ついにFAI（国際航空連盟）航統距離世界記録を更新する。田中館はFAI出席の際の心境を次のように語っている。

「悔しかったのは、毎回各国の持つ世界記録の読み上げで、いつも『日本零』だった事だ。これがいかに長く続いた事か。ところが昨年は神風機が一つ（東京→ロンドン初飛行記録）、今度は航研機が二つの世界記録（無着陸長距離記録、1万キロスピード記録）を作った」

航空に関わり30有余年での感慨をかみしめながら「この日を待ち続け、つ

いにこの慶びに恵まれた。もっと長生きをして日本が作る新記録をこの目で見なければならん。」と述べたという。ついに世界を追い越した、と喜んだ時田中館は82歳だった。

（中村誠 田中館愛橋会事務局長）

【ミニコラム】 記録達成に大きく貢献

3人の青森県人

「航研機」の世界記録達成に大きく貢献した中に青森県人がいた。五戸町出身で東大航空研究所に入り、航研機およびYS 11を製作した木村秀政、弘前市出身で航研機パイロットの藤田雄蔵、むつ市大湊出身で航研機制作に当たった工藤富治の3人である。また、復元された「航研機」は青森県立三沢航空科学館に展示されている。同館には木村秀政が造ったYS 11、田中館が造ったグライダーも展示されている。